

# 不本意入学経験をどのように意味づけるのか

— 青年期の時間的展望に着目して —

二宮早紀

(愛媛大学大学院教育学研究科)

## 問題と目的

今日の大学生の中には、一定数の不本意入学者が存在すると考えられる。不本意入学や入学後の不本意感は出席放棄につながりやすく、やがて休学や早期の進路変更という結果をまねくという指摘もあり(山田、2006)、不本意入学をめぐる問題は学生自身にとっても、また学生を受け入れた大学にとっても重要な課題である。

受験の失敗といったネガティブな経験は、抑うつや無力感といった症状を引き起こしかねない一方、逆にそのような経験を糧に成長を遂げていく者もいる。近年、ネガティブな経験からの適応過程を説明する概念として「意味づけ」が注目されている。不本意入学者は大学進学の際に一度思い描いた進路を断たれており、不本意感を再び抱くことに繋がる可能性があることから、入学時の不本意感に限らず、卒業や就職というイベントが迫っている時期の不本意入学者の不本意感や意味づけについても検討する必要があると考える。

石川(2015)は青年期の時間的展望において、現在、過去、未来の連関過程モデルを提示し、未来への展望を持つに至る過程が、青年の現在の状況やそれに基づく過去のとらえ方によって異なることを明らかにしている。時間的展望とは、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」と定義されている(Lewin, 1951)。不本意入学者の経験の意味づけに、この時間的展望という観点を取り入れて、詳細な検討を行いたいと考えた。

そこで本研究では、不本意入学者を「第一志望の進学先に合格できなかった学生」と定義し、大学生生活の後半にさしかかった4年生の不本意入学者が不本意入学経験を現在どのように意味づけ、将来展望を再構成しつつあるかを、半構造化面接によって調査し、過去・現在・未来の連関過程およびそこで生じている葛藤や成長も含めた分析を行うことを目的とした。

## 方法

不本意入学者であると自認している大学4年生5名に面接調査の協力を依頼し、研究の趣旨を口

頭と書面で説明し、参加の意思を同意書によって確認した。協力者1名につき60分程度の半構造化面接を行った。

## 結果および考察

Aさんは進学校に通っており、偏差値の高い大学を目指す環境の下で高校生活を過ごした。第一志望の進学先に不合格だったAさんは周囲の友人と同じように現役で大学生になることを望み、視野になかった現在の大学に入学した。入学した当初Aさんは高校の友人の進学先と自分の進学先を比較して劣等感を抱いていたことや、高校時代には出会わなかったタイプの友人と出会いショックを受けたことなど、不本意感を抱いていた過去を振り返った。しかし、入学時から現在にかけての語りでは、サークル活動や部活動を通して出会った人達との関わりから、偏差値に関係なく尊敬できる人達がいると考えるようになるといった価値観の変化が語られた。松下(2008)が過去のとらえ方が変化する要因に他者との関わりを見出しているように、Aさんにおいても学生生活の中で出会った様々な年代の他者との関わりにより、学歴に対する考え方が変化したものと考えられる。また、Aさんの現在に対する語りからは、気の合う友人と出会い、現在の生活に満足している様子が見えがえた。石川(2015)は、現在において充実感をもてるような活動ができていると、過去を充実した現在につながるようにとらえる可能性があるとして述べている。Aさんにおいても、現在の生活に対する満足感が過去に対する受容的態度につながったと考える。そして、学歴に対する考え方の変化により、理系は大学院に進学して当然という考えはなくなり、Aさんは4年で卒業して企業に就職する道を選んだ。過去のとらえ方が再構成されたことにより、未来への展望が変化する(石川、2015)という指摘もあるように、入学時の不本意感の要因だった学歴に対する考え方が変化することで過去に対する受容的な態度をとることができるようになり、将来設計においても、周りに合わせるのではなく、自分に合った進路を選択するようになっていったと考えられる。